

## イマジナリー公園散歩日記

ぎふ国際高校 3年

あるいきつけの公園。入り口らしき場所の石碑にはナントカ緑地(憶えていない)と彫つてあつて、南の方向に伸びた川を沿うようにして舗装された道と架かる橋と、サクラの木やら花壇やらが並び、森林浴といえぬすぎるくらいの人工的な自然の中を様々な生き物がそれぞれに生を営んでいる。

公園のちょうどよい広さと、季節によつて変わりゆく自然の新鮮さと、幼い探検気分を手軽に味わえるなどでお気に入りの公園となつたわけだが、しかし昨今の夏というのは健康と命に支障をきたすほどの高温で本能が外を拒む。そうするといきつけがいきつけでなくなつてしまふ。それを防ぐために、これはその公園を歩いた記憶と、夏の公園を歩く妄想を重ねて文字群として残して、こゝへ行つたこととする。

まず公園の付近には駅があつて、道路を一本挟んで向かい合うように位置している。背の高いプラットホームから見下ろせる公園は常に穏やかな雰囲気、季節が違ふだけのいつも通りの安心感が意識の内側に流れ込んでくる。駅から道路を渡つてそこへ向かう最中、夏なのできつと蟬の音が近づいてくる。けれども暑すぎて度々くる電車の音しか目立っていないかもしれない。ちなみに想像している時間帯は昼下がり、空は晴れている。

道路を渡つて最初にある橋を川の景色を眺めながら渡り、整列した背の低いポールと歩道との間に、その公園はある。駅から徒歩数秒、アクセスのしやすさがこの場所の好かれる理由の一つでもある。ちなみにその橋の下には川が流れており、駅の下から流れているようだがどこからの水なのか、何のための水、水路なのかはよく知らない。地元住民でもなんでもないので無理もない。

視野を覆う広場でまず目につくのは厚い木陰の下にあるベンチで休むひと——なのだが、この時期では体力を回復するどころかすり減らしていく。いつもは誰か必ずいる、競争率の高い人気のベンチが今では座り放題かもしれない。次にこの広場の川から離れた方へ、桜の木が大胆に点々としている中を歩くと、ベンチとテーブルが並ぶ、ヒト用の憩い場がある。テーブルの天井には螺旋状ぼく波打っている並んだ角材達が静かに寝ており、少量の植物に寂しく寄生されている。要は藤棚のような人工物と植物とを掛け合わせたオブジェで、今の季節では意外に緑が騒がしいかもしれないと思う。少しはぐれたベンチの付近ではハトの群れを見ることができると、この時期は奥の林に避暑している様子が目に浮かぶ。ベンチに座つて食事をする、人間のうつつかりを狙つて平和主義に足もとをうろついたりする。ここ以外にベンチは少なく、ハトもあまり見ないことからベンチとハトの数は比例しているかもしれないと少しだけ思った。群れからはぐれた、いくらかのベンチから少し距離をおくと円形のステージ

のようなものがあり、中心の鉄の網の下から人工的に冷たい霧を散布させている(秋と冬はからからだつたのが、春に来た際にはこのミストがしてあつたことから)。この季節のこの公園で、唯一の物理的癒しポイントだ。円形の周りはその形に沿って窪んでおり、透き通つた水が流れている。水の道は広場の中を緩やかに彷徨う、道中には遊び心の小島列島がちらちら横切つてあつた気がする。夏休み中の小学生が幼く高い声をあげて水遊びするだろう光景を横目に、川に沿うようにして造られた板の道へ向かう。

板の道は左の林から伸びたテラスのような感じで、右に川と転落防止の柵、自然のトンネルでは熱い木漏れ日がちらちらばらばらと差す。川を眺めながら歩くと、カモやらカメラやらを観察したりするが、この時期のかれらはどうしているかわからない。道中は基本的に生えている花や動物にカメラを向けて、用途の少ない写真とスマホ内の容量とその時だけの満足感をそれぞれに膨らませている。花の知識が疎いので、写真を撮つた後にスマホ内の機能でその花の名前を知るのがたのしい。大体はその場で満足して、結局すぐに忘れる、ゆるやかに微妙な非現実を詰め込んでいく。ちなみに冬にはダイサギが現れる。

板の道が終わつてくたる階段を挟んだ数歩の先、今度は人工的なトンネルがある。トンネルと言つても基本は川用で、頭の上には車が走っている働きの橋だ。空気にも熱が広がるこの時期のそこを皮膚で味わつたことはないが、ひんやりとしていて過こしやすい、軽く洞窟に入ったような気分になれる。足元の間近で流れる川の中には魚がちらほら泳いでおり、左の壁には落書きがだらだらと並ぶ。たまに落ちる水滴を地面の色で予測して避けつつ、輪郭の薄い線を視線で軽く味わつているとすぐにトンネルは終わる。その終わりがけの間、トンネルの天井に目を向けるともうひとつの水面がきらきらふにやふにやと揺れている。日光を川の水が反射してできているのらしい、それっぽい原理のふわふわとした理解が、神秘的という言葉にかなりはみ出して収まる。きつと水中から空を見上げたような、魚の視界の疑似体験をしている。

——この公園を歩ききるには文字数が足りない。この先にはナマの藤棚があつて、コイがわらわら泳いでいて、少年たちの青春が刻まれた街灯と、鉄の骨と葉と蔓の肉でできたトンネルと多くあるが、仕方がないのでこの日は暑さに負けて、トンネルで少し涼んだ後にふらふらと帰路についたこととする。